



## 現代言葉遣い小考(七)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学札幌校国語国文学科 公開日: 2012-01-27 キーワード: 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007178">https://doi.org/10.32150/00007178</a>

# 現代言葉遣い小考（七）

— 国語を教える者の自戒のために —

後 藤 秋 正

前号に、「今回をもって、一旦この連載を休むことにする」

と書いた。すると、小誌を送ると多忙な中でも必ず返事をくださる、筑波大の新保氏から、「連載、どうして中断なさるのですか。〈教育〉〈国語〉に対する今の社会の無神経な攻撃が文化破壊である事を、わからせてくれる大変おもしろいものだと思います。ありがとうございました。この駄文がそれほど有意義なものだとは思えないが、新保氏の好意ある従順に應えるべく、今号にも拙文を掲載することにしました。

そういえば、漢文ゼミ三年生のTさんと話をしていた、国語専攻を志望した動機が話題になった。彼女は国語が好きだったのだが、高校の進路相談の時間に、国語など勉強しても仕方がない（就職口がない？）から、文科系なら法律か経済のほうが良いと言われ、それを振り切って受験したとのことだ。その先生は善意？で言ったのだろうか、経済無策が引き起こした慢性的不況下、あまりにも実利優先・経済効率優先の風潮が蔓延している、大げさに言えば、人類の文明の、特に言語表現に関する

る文化的伝統の、世代を越えた継承が不可能になっていくのではないかと危機感をもったことだった。

①高橋輝次編著『古本漁りの魅惑』（東京書籍、二〇〇〇・三）

●五四頁「郊外散歩 病膏盲に入る。」（保昌止夫「購書雑記」）

またやっっている。「膏盲」なのだ。

●七八頁「神戸名所」は稚拙な筆致構図ながら、……エキゾチックな味を持つてゐる。（岩佐東一郎「兵隊古本屋」）

「稚拙」がわからない。「稚拙」か。

●一三六頁「日本の講釈師が、張り扉から敲きだす嘘八百の所謂実録譚みたやうな物語で、……」（野口米次郎「クロード・デュバル」）

「張り扉」にはまいった。「張り扉」でしよう。

●二三八頁「私の禁書三昧のしがない人生が厳然と存する故以。」（城市郎「果てしなく哀歎孕む『古書目録』」）

「故以」がわからない。「所以」ではないだろうか。この

本にはこういうたぐいの誤植が多い。「微臭ひ」↓「微臭ひ」、

「再販」↓「再版」などなど。高橋輝次という人はフリー編集者だそうだ。彼はこれ以前にも『古本屋の来客簿』『古本屋の本棚』などの古書にまつわる本を編んでいる。これらの本にも誤植が多かったが、この本も同様。原文そのものが誤植なら「ママ」とでもすれば良い。せつかく多くの随筆類から楽しく貴重な話を集めているのに、興趣をそがれることはなほだしい。しかも最近の本の例に漏れずパソコンで編集したらしく、一二九頁の五行目など、「中々進まぬ。」という一文を、行の冒頭に「中」という一文字を置いただけで改行してしまふから、四〇字以上が空白になっているし、二〇〇頁の一四行目は、末尾の一文字分が空白になっている（他にもある）。これは次の行頭に「上げますよ」というかぎ括弧のつく文がくるためにそうなっている（括弧が行末に来ないように禁則指定している）のだが、印刷する際には、前の行で字間を微調整して空白を作らないように配慮するのが編集者の常識だろう。高校教科書も出版している東京書籍の書物だからこそ、信頼が失われないように切に祈る。

②「売れています」（毎日新聞夕刊、二〇〇〇・六・五）

●「……臨場感がある。これにおさだまりの巻き舌のヤクザ言葉がかぶさり……」

新堂冬樹『無限地獄』という本の書評。「お定まり」という表現をしばしば見かける。その時には、これを「おさだまり」と読むのか「おきまり」と読んでいるのかはつきりしな

いので取り上げることが控えていた。このように平仮名で書いてくれるとはつきりする。「御決まり」の誤用なのだ。

③姉小路祐『汚職捜査』（講談社ノベルズ、二〇〇〇・六）

●一七頁「〔SPのバッジは〕太陽と月を組み合わせたものだった。それは「昼夜をいとわず警護する」という意味を表していた。」

昼を厭う者はいないのだから、「昼夜を問わず」の誤りか。

④『中学国語2』（教育出版）

●一一頁「無数の桜の花が一斉に満開した。」

教育実習の研究授業で目にした国語の教科書に収録されている、内海隆一郎「残されたフィルム」の一節。この一節の数行前には、「満開にもなっていないわ。」というせりふがある。「満開」を動詞に用いることには違和感があるのだが、『辞林21』にも、「満開」の語の見出しのあとに、「スル」と、サ変動詞として用いられるむねの表示がある。もう定着した用法だということなのだろうか。一一三頁には「〔桜前線の曲線は〕比較的緩やかなカーブをかきつつ、……」という一節もある。「カーブをかく」とは？「カーブを描く」ならば違和感がないのだが。

⑤唐沢俊一『古本マニア雑学ノート』（文庫版あとがき）幻冬社文庫、二〇〇〇・八）

●三〇八頁「この元本を執筆したときは、……いろいろと思考錯誤を繰り返し、大げさでなく四転八倒した。」

文庫本になった機会に再読してみた。ひねった言い方のよ

うにも見えるが、「試行錯誤」「七転八倒」だろう。

⑥三好徹『興亡三国志』第五卷（集英社、一九九七・一〇）

●三九七頁「また『曹操論集』……『三国志漢義』の各書に被  
益されることが多かった。」

「あとがき」の末尾の文章。この本は、近所の小さな安売り  
店の店頭で百円均一で並んでおり、しかも全五巻が揃ってい  
たので放置するに忍びなくて買ってきたもの。『三国志演義』  
という書名と「裨益」くらいは正確に書いてほしい。

⑦岡崎武志『古本屋さんの謎』（発行同朋社、発売角川書店、  
二〇〇〇・三）

●八二頁「まだ一歳になるくらいの愛娘をひぎに、……。」

「……になるかならないかくらいの」の短縮型か。

●九一頁「電車に乗って遠来からでも買いに来るといふ、……。」

「遠来」だけで、遠くからやって来る意だから、遠来など  
と言わずに、遠くからと言えばよいのに。この本にはルビに  
も不思議なものがあって、「田村治芳（よしはる）」（二〇  
四頁）とか、「梅（うめず）ヶ丘」（二〇八頁）とかは理解  
に苦しむ。作者はあとがきの最後に「この本が新刊書店に並  
び、いずれ古本屋さんの棚にも並びますように……。」と書  
いている。作者の希望どおり？小樽のI古書店で購入した。

⑧風著『風の書評』（ダイヤモンド社、一九八〇・一一）

●一四一頁「人気文筆家というのは、おそらく付き合いのいい  
人種とわかっておどろいた。」

「おそろしく」だろうね。百目鬼恭三郎著『続風の書評』（一

九八三・二）を先に読んだので、ついでにこれにも目を通し  
てしまった。

⑨近藤富枝『自分を磨く女の心わざ』（海竜社、一九九〇）

●二二頁「ひとから葡萄の巨砲をたくさんいただいた。」

巨砲ですね。二七頁にも「巨砲で染めた紫色の紙」とある。  
彼女の著書は『本郷菊富士ホテル』をはじめ愛読していて、  
古書店で見かけると購入することになっている。この本で、彼  
女が戦後の一時期、わが生まれ故郷である静岡県御殿場の東  
隣の小山町で生活していたことを知った。

⑩山際明利『北宋四子墓探訪記』（「東方」二四〇、二〇〇一・  
二）

●三頁「〔張載の祠堂は〕他間に漏れず文化大革命で破壊され  
たが……。」

他聞は、「他人に聞かれること。ひとときき。外聞。」（角川『新  
字源』）、「他聞をはばかる」などと用いる。ここは、「漏れず」  
に続くのだから、「多分（古くは、他分とも書いたらしい）」  
としなければならぬ。しかし、多分、多聞、他聞は混同し  
そうではある。

⑪NHKラジオ「暮らしセンスアップ」（二〇〇一・二、午前）

●「食という字は人を良くすると書く。人を良くするのが食事  
なんです。」

ゲストの料理専門学校校長服部氏が言った言葉。結婚式で、  
人という字は、二人の人間が支え合っている形、などと言う  
たぐいの俗解。子どもが漢字を覚えるための便法だったら仕

方ないが、こういうことをあちらこちらで言って歩いている  
んでしょね。一度くらい漢字辞典をみたらどうだろう。

⑫工藤静香のファックス（STVテレビ「得ダネファイル」、  
二〇〇一・三・六午後）

●「主治医の先生の反断で……」

退院したことを報せる報道各社あての本人直筆のファックス。このごろはワープロで済ませることが多いのに、きれいな文字だったので、顔をテレビ画面に近づけて見てしまった。誤字があったのは残念。

⑬「卒業論文」中の誤字の一例（二〇〇一・一）

●「悄然」「茶毘」「確心」「注告」「幣害」

順に「悄然」「茶毘」「確信」「忠告」「弊害」と書きたかったのだ。これらの誤字を注意する機会がなくなってしまうので、国語科の卒論をワープロ化することは、時期尚早だと確信している。

⑭「『洲崎パラダイス』のころ―芝木好子」（船山馨『みみずく散歩』構想社、一九七八所載）

●一一七頁「乱用していた覚醒剤からは、……遠去かっていたものの、……」

「去かる」という言葉はないから、「遠ざかる」と平仮名にしなくては。滝川の古書店で求めたこの本、帯に「『石狩平野』『北国物語』の著者の初エッセイ集」とある。戦前の札幌や小樽のことがしばしば登場し、引きこまれて一気に読んでしまった。佐藤忠良の装幀も美しい。

⑮『孟東野詩注』（台湾・新文豊出版股份有限公司、民国六八年八月初版）

●「孟浩然著」

陳延傑『孟東野詩注』を複製し、一九七九年に出版されたこの本は、表紙に「孟浩然著」とあるばかりでなく、奥付にも「著作者 孟浩然」と記してある。発行者は劉修橋。劉修橋はよほど古典文学にうとい人だったのだろう。孟東野は、孟浩然ではなくて孟郊なのだから。

⑯「子供と向き合う①母」（毎日新聞朝刊、二〇〇一・四・八）

●「深夜まで狭い厨房に立ちずくめで、時給は昼間800円、夜間1000円。」

「ずくめ」は、『辞林21』に、「**【尽くめ】**（接尾）それ以外の何ものでもない意を表す。すべて……である。『いいこと』とある。いっぽう、「**【づめ】**」のほうは、「**【詰め】**」⑤その動作・状態を続けること。『終点まで立ち—だった。』とある。やはり「立ちずくめ」は誤用だろう。同じ記事中に、「警視庁綾瀬署の刑事数人が突然訪れ、逮捕状をかざした。」という表現がある。「かざす」は、「手に持って頭上に高くかかげる」（『辞林21』）こと。テレビドラマの一シーンのようだが、実際の刑事さんたちも逮捕状を頭上にかかげたりなさるのだろうか。

と書いて、高島俊男『お言葉ですが……』⑤キラいなことば勢揃い』（文藝春秋、二〇〇一・二）を読んだら、たまたま「結構ずくめ金ずくめ」という項があり、『辞林21』の説明にも

かわならず、「尽くめ」という表記は正しくないことを知った。「尽くめ」だったら、「づくめ」と書かなければおかしなことになる。

⑰ スーパーマーケットチェーン店の役員の発言（HBCテレビ「ブロードキャスター」、二〇〇一・四・二九夜）

● 「お客さまを価格でもて遊ばない」

テロップで表示されたもの。Jというスーパーは不況でも業績が下がらないのだそう。そのJの経営理念を語ったもの。「弄ばない」だろう。役員に罪はない。このようなテレビのテロップは誰が作成するのか知らないが、レベルが下がっていることは確か。市内新川のH薬局で見かけた、「承る」の新変種「調剤受たまわり処」も、ここに記しておく。

⑱ 「滝田ゆう落語劇場 第二輯」（文春文庫、一九八三・四）

● 「そして八つ草木も眠る丑満どき」

「もう半分」の一場面。「もう半分」は、古今亭志ん生と古今亭今輔がしばしば高座にかけたそう。これは「丑三つどき」だね。

⑲ 「北京三千年・水と石の都 歴史家ジニーさんの古都探訪」

（NHKBS11、二〇〇一・四・二九夜）

● 「陶然亭公園」「万松老人」

漢字の表記が誤っているというわけではない。この言葉をナレーターの手田悌三が、それぞれ「タオランティンこうえん」「まんまつろうじん」と読む。「陶然亭」を中国語の原音に近く無理に読もうとすれば、そのようになるだろう。しか

し、耶律楚材（一一九〇—一二四四）が若いころ師事したという高僧の名を、まんまつと音訓混合して読むのには驚いた。どうしてバンシヨウと音読みしないのか。まさしく「けざわあずま」のレベルだ。いったいに、NHKは中国の固有名詞の読み方が非常に杜撰で、この番組でも「盧溝橋」はロコウキョウと読むのに、「高粱橋」はコウリヤンバシと読む。基本的には中国の固有名詞は、音読みするべきだろう。「盧溝橋」は、日本でも読みは定着しているから、ルーコウ・チャオなどどと読む必要はないとしても、「高粱」をコウリヤンと読むことが定着しているとは思えない。「高粱」と誤解したのだろうか。「梁」と「梁」は発音が同じで、「辞林21」には、「コウリヤン（高粱）」「コウリヤンしゅ（高粱酒）」が載っている。番組自体は、日本人を夫にもち、北京に十年以上暮らしているというジニーさんが、北京中心部にある観光名所ではない、遼（九三八—一二二五）・金（一一一五—一二三四）時代の埋もれつつある遺跡を尋ね歩く、NHKならではの地味だが味わい深いものだっただけに残念だ。また遼・金ならば、せいぜい千年ほど前なのに、タイトルに「北京三千年」と称するのも何やら誇大広告めいている。

⑳ 「考え込むコラム 高級ブランド」（毎日新聞夕刊、二〇〇一・

五・三〇）

● 「私のファースト・ヴィトン」は社会人になった年、23歳の時に買ったポストンバッグだ。……そう、かく言う私も、ブランドが嫌いでない。というか、けっこう好き。正直言うと、

大好きかもしれない。」

「海外の高級ブランド製品が売れている」という特集記事。

「というか」「ていうか」という語が学生たちの会話中にしばしば聞かれるようになってから、だいたいだつ。こちらが話をする、ひと区切りつくのを待って、すかさず「ていうか」とやられると、こちらが説明したことを理解してもらえず否定されたのかと思つてがっかりする。しかし、完全に否定しているわけでもないらしく、部分的に肯定した上で単に別の角度から説明したり、事例を追加したりするだけであつたりする。あなたはこちらの話をどのように受けとめたのか、まずそれははっきりさせてから自分の意見を述べなさい、と言いたくなる。さらに、一人の話の中にこの語が頻出すると、よく聞いていても結論がはっきりせずイライラさせられる。会話の上だけのことかと思つていたら、このまだるっこしい言い方が堂々と新聞にも載つていて驚いた。この記者がブランド好きかどうかなど、まったく関心がないけれど。

②① 「セツショウ」(NHKラジオニュース、二〇〇一・六)

● 「摂政」と「折衝」

ネパールの首都カトマンズで、国王が銃撃されて亡くなった。詳細はなおわからない。国王が亡くなったので摂政がたつた。この摂政の語をNHKのアナウンサーは申し合わせたように折衝と発音する。昔はNHKのアナウンサーの発音が標準とされたものだったが、もはや信頼できない。

②② 大屋幸世『蒐書日誌 一』(皓星社、二〇〇一・六)

● 四八頁「酒と歌とが先生にとつて最大の慰藉であつたらう。」

「慰藉」は、「慰藉」の誤植だろう。この本、森鷗外の研究者である著者の「蒐書」の日々を日誌風に綴つたもの。専門外なので理解できない部分も多かったが、その集書への熱意と読書量には圧倒させられ、数日間はこの本ばかり読んでいた。帯には「私にははる限り初出で読みたいという思いがある。臨場感を味わいたいからだ。―ある研究者執念の古本屋めぐり」とある。これを読むと自分など書物のことを何も知らないのだと思う。それにしても、東京のあちこちの古書店・古書展を頻繁にのぞける著者が本当にらやましい。

● 七七頁「朝日書林の雑誌の山の中から『高橋元吉詩碑記念誌』(昭41・5・7〈序幕当日〉)を見つけ出す。」

詩碑とあるのだから、「除幕」だろう。

● 七八頁「屹立しているようなその姿は、詩人、文学者以外の何ものでもなかった。」

これは屹立だね。ただし、二〇九頁には、「屹立せんとする精神」とある。同じ頁に「前橋随一の書店煥乎堂」とあり、次頁には、「煥呼堂」とある。どちらかが誤植。

● 八一頁「私は本間の現実反映的リアリズムのイデオロギツシユな文学論には、とうてい組みし得ないが、……」

「与し得ない」だろう。もっとも最近「組す」という表記も許容されているようだが、『蒐書日誌 二』の五二頁にも、「福田恆在の九十九匹の論に組みするものだが」とある。

● 一五六頁「人民委員会の任務は微に入り細いにわたり、……」

「い」は不要。

●一九五頁「しかしわずかふた月で、八〇版まで売れたのか。不信ではある。」

これは「不審」。二九四頁にも、「私はそんな近代文庫を見てはいない。不信なところである。」とある。ただし、三八〇頁には、「ちよっと不審な感も残る。」とあるから明らかな誤植。

●二六四頁「硯学河野與一」

よくやる「硯学」の誤り。

●三二八頁「日本文学報告会編『俳句のすゝめ』（昭19・6・5三省堂。初版一万部）、五百円。」

発行年代から考えて、日本文学報国会ではないだろうか。

●三三一頁「アメリカもロシアをフランスも中国も……」

これは、「ロシアも」だろう。

●三四六頁「本掛がえりの今、文庫本でも、全集でもなく、……初版本で読むことにしている。」

「本掛がえり」が正しい。三七六頁の「不思議」は「不思議」。*suksuina*とだが、三三二頁の「初出一覧」に「『国文

鶴見』第三号 一九九五年」とあるのは号数が違うだろう。

その前にある「国文鶴見」第二七号が、一九九二年刊行なのだから。蛇足ながら一四七頁に、「多分私たちが桑の実を摘んで食べた最後の子供の世代ということになるのではないか。」とあり、「前橋の町はずれで育ち、野生の桑の実は少年時代の甘い自然のめぐみだった。」とも言っている。著者は

一九四二年生まれで、小生より五歳年長。小生も小学生のころ、いとこたちと御殿場の田舎でよく食べて口の中を紫色にし、食べ過ぎると腹をこわすと叱られたものだった。

②③大屋幸世『菟書日誌 二』（皓星社、二〇〇一・六）

●九頁「知る人は知っているのるかも知れないが」

これは単なる誤植。

●二二頁「出版会を皮肉っていて面白い。」

前行には「出版界歳時記」とある。

●二三頁「これが私の校正病の初微である。」

病気だったら、「初微」ではなからうか。

●三二頁「これはいくらなんでもあこぎない。」

五百円程度が適正価格である内容見本が千円もするのはおかしいと言うのだ。津市の阿漕カ浦の漁師の逸話に基づいて強欲であくどいさまを言うこの言葉は「阿漕だ」という形で用いられる。「あこぎない」などというのかしらん。

●三四頁「会場内でも、助手の富田さんを……と大きな声で呼び寄こすのも、……名物であった。」

「呼び寄せる」ではないか。

●五〇頁「二五年間に互って書かれた」

漢字で書くならば「互って」、もしくは「亘って」。

●七五頁「白鳥にとっては日本女性の裸体は見るに絶えなかつたのか。」

これは「耐えなかつた」だろう。

●一〇一頁「外電の封ずることとして」

これは「報ずる」の変換？ミス。

●一〇四頁「的を得ているのではないか」

一五五頁には「的を射ている」とある。こちらが正しい。

●二二七頁「阿部次郎の『美学』を」若い芸奴が買つてつて

「芸妓」の誤植。

大屋氏のこの大冊に、二週間ほどかかってようやく目を

通した。氏は今日も都内の古書店・古書展を精力的に廻っ

ているのだろう。近代文学を中心として関連するさまざま

なジャンルに目を配っている氏の熱意と多読ぶりに感服。

②4 「マオマツ」(NHKテレビ、二〇〇一・七・一二)

「龍泉窯で青磁を焼く」という、夜一時過ぎの番組を見

ていたら、「マオマツ」という耳慣れない言葉が聞こえてきた。

磁器を焼く木材の名称らしい。字幕を見ると「馬尾松」と書

く。中日辞典にちゃんと項目があつて、アカマツの一種との

こと。中国語で「マーウエイソン」と言わなくとも、せめて

「バビショウ」と言わないものか。NHKの、中国関係の固

有名詞の無茶苦茶な読み方は、以前にも指摘したが、なぜこ

のようにでたらめな音訓ませこぜ語を發明？するのだろうか

か。それともこの読み方は日本語として定着しているとしても

いふのだろうか。

②5 「ナレーターの言葉」(「ニュース北海道」NHKテレビ、二

〇〇一・八・一四夕刻)

●「それまでは馬車による交通手段がおもでしたが、……」

札幌市交通資料館を取材した時の説明。市電・市バスが登

場する前は、馬車が主要な交通手段だったと言いたいのだろ  
う。聞き過ぎしてしまふところだが、「馬車による交

通手段」とは、馬車そのものが交通手段なのだから、おかし

な言い方ではないか。「交通手段としての馬車」ならばわかる。

せめて「それまでの交通手段は馬車がおもなものでした……」

と言つてもらいたい。

②6 生島治郎『上海無宿』(中公文庫、一九九七)

●二四四頁「久永は二股かけていたわけだ。……あんなたちを

撒いて中共陣内へ入りこめれば……。」

なんの根拠もないのだが、「尾行をまく」という時の「まく」

は、「煙(けむ)に巻く」という言い方もあることだし、

「巻く」と書くものだと思ひこんでいた。『辞林21』の「撒く」

を引くと、「③追跡者などに自分の居所がわからないように

する。」と載っている。不明を恥じる。

②7 S・M氏「陶詩の用語に関する一考察」(『陶淵明全釈』明治

書院、二〇〇一所収)

●「小論も、それらから裨益を受けた。」

注(1)に見える。以前にも書いた記憶があるが、「裨益」

はこれだけで、「補い役だつ。助けとなる。」(角川『新辞源』)

という動詞なのだから、「裨益する」「裨益される」としなけ

ればならない。「利益」などと混同したか。ただし、論文自

体は大変に有益だった。齋藤茂氏から送っていただいた「孟

郊交遊考(その三)」(「人文研究」五一、大阪市立大学文学

部紀要、一九九九)には、「……を見て大いに啓発、裨益さ

れた。」とある。当然のことだが気持ちがいい。

⑳ 松田伸子「中隠の住まい―陶淵明の住環境をめぐる表現を中心に―」（東大比較文学会「比較文学研究」五五、一九八九）

●一五一頁「宅地の広がりには十余畝というから、今の単位で言えば大方三十メートル平方ほどのこじんまりとした一角を為しているわけである。」

陶淵明の「帰園田居五首」（この詩題も「帰園田居」と誤っている）（其の一）に、「方宅は十余畝、草屋は八九間」とあることについて述べた部分。陶淵明の家の宅地が「三十メートル平方」とは、なんとまあ狭いことかと思つたのは、「三十平方メートル」と読み誤つたからだ。三十平方メートルでは、間口と奥行がおよそ五ないし六メートルしかない。「三十メートル平方」は、三〇メートルかける三〇メートルで、九〇〇平方メートルとなるわけか。松田氏は九〇〇平方メートルの宅地の一角に淵明の家が建つていたと考えたのだ。それにしても松田氏は「畝」という単位を何に基づいて換算したか。手近の辞書で調べると、三世紀の魏の時代の一畝は、約五アール。隋になると約七・五アール。東晋時代の一畝は五アール強と考えて良いだろう。一アールは一〇〇平方メートルだから、十畝は一〇〇〇平方メートル、「十余畝」を十二畝と仮定すれば、一二〇〇平方メートルということになる。つまり、「方宅は十余畝」とは、たてよこがそれぞれ三五メートル前後の広さの宅地を指していることになる（もちろん家の面積、いわゆる建坪は当然これより狭い）。松田氏

は続いて、「『八九間』とはいっても、それがそのまま居室の数というわけではもちろんあるまい。……窮屈でこそないものの、けつして空室ができるほどの、広い住まいではなからう。一間一間が人に住まわれ、あるいは使われるうちに、それぞれが人に馴染んでちょうどよい温もりを帯びた空間となりうる大きさである。」と述べる。ちなみに、この詩には「虚室 余間有り」という句もあり、一海知義氏は、「ひとけのない部屋にはゆつたりとした余裕がある」と訳している（岩波中国詩人選集『陶淵明』）し、また、岩波文庫の松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集（上）』は「十余畝」について、「敷地がゆつたりとしているさまを言う。当時の一畝はおよそ五六アール。」と正確な注を付している。どうも松田氏は帰隠後の淵明の住居を一回り狭く考えているように思える。ただし、この「園田の居」は、義熙四年（四〇八）の六月に火事で全焼してしまう。ことは「戊申の歳六月中、火に遇う」詩に見えている。

㉑ 「毎日の知恵」（毎日新聞夕刊、二〇〇一・九・一一）

●「ノリの缶は書類入れやスカーフを入れています。」  
再利用の効用を説く「阿部絢子さんから一言」という欄にある一文。どうして、「書類入れやスカーフ入れに入っています」か、「書類やスカーフを入れています」としないのだろうか。本当にノリの缶に書類入れを入れているのかしらん。

⑳ 「三枝和子」（札幌・N書店「古書目録」一一号、二〇〇一）

●「水原秋桜子 三枝和子 三好文夫 三好達治」

近代文学（小説・詩歌）の項目に並んだ作者の名。作者の五十音順に並べてある。前後がみずはら、みよしだから、きつと「三枝」をみつえだとも読んだのだ。さいぐさではないか。このN書店の目録、滝井考作とあったりして、『唐山の鳩』など欲しい本はあるのだが、注文しそびれている。

③1 『言葉に関する問答集』よくある「ことば」の質問―（国立国語研究所、二〇〇一・三）

●六〇頁「長期間に渡る濃厚な言語接触や、……」

以前にも書いた。どうして、「互（巨）る」とするか、平仮名にしないのか。同じ頁に「文字、語彙、……など多岐に渡り、……」ともある。確信犯だ。二二頁には「寛政九（一九七九）年」という誤記もある。寛政九年ならば、一七九七年が正しい。「渡る」の件を指摘して葉書を出したが、果たして返事が来るか。

その後、独立行政法人「国立国語研究所」のなんとか課長（お名前と正確な肩書きを失念した）と名乗るかたから、研究室に電話をもらいびびっくりした。はじめに葉書の札を言うので、お詫びの言葉が続くと思つたら、どうも要領を得ない。執筆者の個性というようなこともおっしゃっていたような気がする。なぜ、原稿の点検ミスだったので執筆者にも伝え、次回からはこのようなことのないようにする、と言わないのだろうか。今だにすつきりしない。

③2 「遠山文科相が児童と触れ合う」（毎日新聞朝刊、二〇〇一・九・二九）

●「文科相は自らもお手玉を披露するなど約20分間、児童たちと触れ合った。」

遠山文科相が千歳市立向陽台小学校を訪問して、二年生の生活科の授業を視察したという記事。誰かのエッセーでも、この「触れ合う」の語感がべたべたして気持ち悪いと書いていた。確かにこのごろ、「触れ合う」が多用され、公共施設の名称にも「○○ふれあいセンター」などというのが多くなつた。この記事、どうして、交流した、遊んだ、などと書かないのだろうか。『辞林21』の「触れ合う」の項には、「①互いに相手に触れる。接触する。②気持ちを通い合う。」とある。記者は②の意味で用いようとしたのだろうか、たった二十分間で児童と心が通い合うと考えるのも滑稽だ。

③3 川島勝『井伏鱒二―サヨナラダケガ人生』（文春文庫、一九九七）

●一九三頁「すき焼きがメイーンであった。」

「メイーン」が発音できない。二二三頁にある「長年井伏文字に親しんできた」が「井伏文学」であるのと同様の誤植だろうか。

③4 本田マサフミ「週末レジャーコーナー」（HBCラジオ、二〇〇二、午前七時四五分頃）

●「夏炉冬扇」

月日を失念したが名寄ピヤシリスキー場は雪質がすばらしいという案内。本田というレポーターが、雪質が良い理由を、名寄は気温差が六〇度もあって、カロトウセンだからと言う。

ベッドでうつらうつら聞いていたのが、ここで目が覚めてしまった。「夏炬冬扇」は「冬扇夏炬」とも言う。「新字源」には、「夏の火ばちと冬のうちわの意で、無益な言論や才能のたとえ。」とあり、出典として「論衡」を挙げている。ただし、『辞林21』には、「〔論衡〕季節はずれで役立たずのもの」とえ。」とあって、若干ニュアンスが異なる。いずれにしても、夏は暑く冬は寒いことを言うものではない。

③⑤ 角川源義 『幻の赦免船』 (読売新聞社、一九七五)

「戦後出版界の風雲児が、……愛と風狂の果てに妖逝した今、……」

「角川源義遺稿集」と銘打たれた帯にある言葉。「妖逝」は「夭逝」だろうね。一九一七年に生まれ、一九七五年に五八歳で没した角川書店の創業者を「夭逝」と言うかどうかは別としても。この本、葬儀委員長松本清張の「弔詞」が載っているのに惹かれてS古書店で購入したもの。

③⑥ 岸部四郎 『岸部のアルバム―物』と四郎の半生記』 (夏目書房、一九九六)

一五頁「関西テレビのドラマ『父子鷹』(下母沢寛原作)」これは「子母沢寛」の誤り。二二頁にも「下母沢寛の『新選組始末記』がピカイチ」とある。ちなみに子母沢は、札幌からほど近い厚田村の生まれで、文学碑がある。

●一六頁「巖本善治は、……『女学雑誌』を主催する進歩的的文化人である。」

見過ごしそうだが、「主宰する」だろうね。

●二二頁「鷗外は岩見の出、……」

森鷗外は「石見国津和野」の生まれです。

●六七頁「ポルシェが日本ではじめて平行輸入されて、……」

「並行輸入」の間違い。この本、古本屋でしばしば見たものだったが、もとグループサウンズのメンバーが書いたものなどと軽視して、手に取ることもなかった。それが古書を扱った別の本に取り上げられており、折よく、某古書店の目録に載っていたので注文したもの。なるほど第一章が「ノスタルジーとしての初版本」で、「荷風の私家版を求めて」「奇婦人・森茉莉(「茉莉」の誤り)」などの文章が収められている。岸部四郎はテレビのワイドショーの司会などをしていてよく見かけた?ものだったが、このごろはまったく見なくなってしまう。彼の、初版本やらブリキ玩具やらヴィンテージ・ジーンズやらのコレクションはどうなったのだろうか。

③⑦ 棋士の名前 (全日本早碁オープン戦「毎日新聞」夕刊、二〇〇二・三)

●黄奕昀四段

これに、「こういうん」とルビが振ってある。「奕」は、漢音はエキ、呉音はシャク、昀は、あまり見かけない字だが、『大漢和辞典』にはインという音しかない。ちなみに、日光の意だそう。以前にも書いたが、中国人(黄四段は王銘琬本因坊の門下とあるから台湾出身なのだろう)の姓名の読み方はどうしてこのようにでたらめなのだろうか。

※蛇足〈其の一〉

卒業論文に「思惑」という言葉が使ってあったので、口頭試問の時、学生にどう読むのか聞いてみたら、案の定、「しわく」と読む。「惑」は当て字（手近の古語辞典で「思はく」を引くと、「おもふの未然形＋接尾語く」とある）だから、それで読みにくかったのだろうが、学生に書かせるだけではなく、読みの練習も大切だと痛切に思ったことだった。

※蛇足〈其の二〉

古書のI書店を尋ねたとき店主に、このごろになって今は廃刊になったO文庫が気になって、見かけたらなるべく買うことにしていると話したら、店頭には並べていないが倉庫に二本くらいあるので今度出しておくと言ってくれた。一週間ほど経って再び訪れると、三〇冊ほどを紐でくくったものを二束（この一束を一本と言うのだ）出しておいてくれたので遠慮なく一〇冊余りを頂いた。値段も良心的だった（他の本の値段も）。お礼を言うと、まだウブイものですから、と専門用語？が飛び出した。きちんと約束を守って店に出していい本を見せてくれたこと、良い本が手に入ったこと、そして業界用語に触れたことで、その日は一日中気分が良かった。

※蛇足〈其の三〉

このごろ時おりインターネットの「スーパー源氏」などで絶版文庫を購入する。ところが送料がまちまち。梱包料金をとるところさえある。同じように文庫本を一冊注文しても、代金引換郵便で送ってくる相模原の「F文庫」は四九〇円、

メール便で送ってくる古書の「FB横丁」は二〇〇円。前者では五〇〇円の文庫本がほぼ二倍の価格になってしまい、ものすごく損をした気分になってしまう。坪内祐三『三茶日記』（本の雑誌社、二〇〇二）ではないが、「本当に貧乏性だね、私は」。ただし、坪内氏は「貧乏症」と書いている。

※蛇足〈其の四〉

二〇〇一年度の卒業式（学位授与式）から、式次第の簡素化とのことで、送辞が割愛されることになった。Y主事に答辞はどう呼んだら良いだろうと尋ねられたので、送辞がない以上はそれに答える「答辞」という名称はおかしいから、卒業の言葉とでもしたらどうでしょうか、と返事をしておいた。しばらくして主事が戻ってきて、『広辞苑』には、式辞に答える言葉も答辞というところがあると言った。確かに『辞林21』にも、「式辞・告辞・祝辞などに答礼する言葉。」とある。式辞があるならば答辞でいいわけだ。深く考えもせず、いい加減な返事をしてしまったことを恥じる。

※蛇足〈其の五〉

某日、K書林に立ち寄ったら、文車の会「ふぐるまブレイク」の創刊号から、八二号（反町茂雄追悼号）までの、合本三冊（某古書店によると、古書価二〇万円以上だとか）を貸してくれた。古書店で本を借りたのは生まれて初めて。面白い記事や裏話が満載で、安価な本しか買えないことは変わらないものの、古書の世界がぐんと身近になった。